

2016年  
8月9日(火)  
第9号

ナガサキ

## ピース・タイムズ

NAGASAKI PEACE TIMES

発行者【PUBLISHER】  
**日本非核宣言自治体協議会**  
 (にほんひくせんげんじたいきょうかい)  
 〒852-8117 長崎市平野町7番8号  
 長崎市 平和推進課内  
 電話 095-844-9923 FAX:095-846-5170  
 E-mail info@nucfreejapan.com  
 ホームページ http://www.nucfreejapan.com

非核協おやこ記者新聞



# 被爆71周年に考える平和 ～こぎ出そう！新しい平和の海へ～



2016(平成28)年8月9日。昨年の被爆70周年の節目を経て、長崎は71周年の夏を迎えました。  
 今年も全国から9組の親子記者が長崎に集まり、「こぎ出そう！新しい平和の海へ」をメインテーマとして、

新たな気持ちで平和を考える取材をスタートさせました。【編集部】

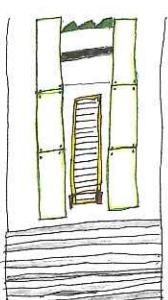


去年、平和をテーマにした英語のスピーチ大会で好成績を収め、今年5月、アメリカのオバ

## 多様性を理解し合える世界に —英語で平和を発信—



が印象的でした。



ドイツでは8月9日

ロート副議長は祈念館の建物の設計や水と光を生かした空間にとても感心され、「悲しみのためだけではなくつながっていい」とい、祈りや癒しを感じられるところが、未来につながっていい」とおっしゃっていました。



## 原爆の犠牲者は全人類の犠牲者 —平和実現を学ぶことが大切—



ドイツ連邦議会 副議長  
クラウディア・ロートさん

【田中 景嗣・賴子記者】

マ大統領の広島訪問に立ち会つた、長崎市の中学3年生、森内暖安さんにお話を伺いました。森内さんは、スピーチ大会で、違いを認め合うことの大切さについて発表したそうです。「大会に出場して、ぼくの考へる平和が伝わつて嬉しかつた」と言っていたの

森内さんは中学生なのに自分の考えがしつかりしていて、平和への思いが強い人でした。得意なことで自分の気持ちを広く伝えることができて、かつこいいと思いました。

【向井和・幸子記者】



長崎平和宣言を読み上げる田上市長

私は初めて長崎原爆犠牲者慰靈平和祈念式典に参列しました。式典は70代から90代の被爆者合唱団のキレイな歌声で開会しました。

原爆で、8月9日までに17万2230人が亡くなつたそうです。各国の大天使やそれぞれの代表が献花をし、犠牲者の冥福を祈りました。

原爆が投下された午前11時2分には、平和の鐘が鳴り響く中、参列者全員で黙とうし、田上長崎市長が「長崎平和宣言」をすると同時にたくさんの方々が放たされました。原爆についてあまり知らないなかつた私は、田上市長の「事実を知ること、それがこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです」という言葉が心に響きました。世界中で戦争がなくなつて、これからずっと平和であることを願っています。

原爆が投下された午前11時2分には、平和の鐘が鳴り響く中、参列者全員で黙とうし、田上長崎市長が「長崎平和宣言」をすると同時にたくさんの方々が放たされました。原爆についてあまり知らないなかつた私は、田上市長の「事実を知ること、それがこそが核兵器のない未来を考えるスタートラインです」という言葉が心に響きました。世界中で戦争がなくなつて、これからずっと平和であることを願っています。

【若杉悠華・育子記者】

約締結を求める署名をも



リトニアの活動報告をする田中さん

【奥村尚之・佳恵記者】

田中さんは今年5月、チエルノブリ原発事故30年記念式典に出席し、リトニアやラトビアの被ばく者や高校生と話をしました。

田中さんは今年5月、チエルノブリ原発事故30年記念式典に出席し、リトニアやラトビアの被ばく者や高校生と話をしました。田中さんは教えてくれたように、なんでも好奇心を持つて、いろんなことを見たり聞いたりして、みんなに伝えていきたいです。

長崎大学核兵器廃絶研究センターでは、核兵器をなくすための調査・研究・教育の3つの取り組みを行っていると、広瀬訓副センター長にお聞きしました。1980年後

## 核兵器をなくすために —まずは友達と仲良くしよう—



半には地球上に最大8万個の核兵器がありましたが、世界中が協力して、2016年には1万5350個に減らすことができたそうです。

私は、核兵器をなくすために、友達と仲良くすることから始めたいと思いました。

【長坂桜弥・綾記者】

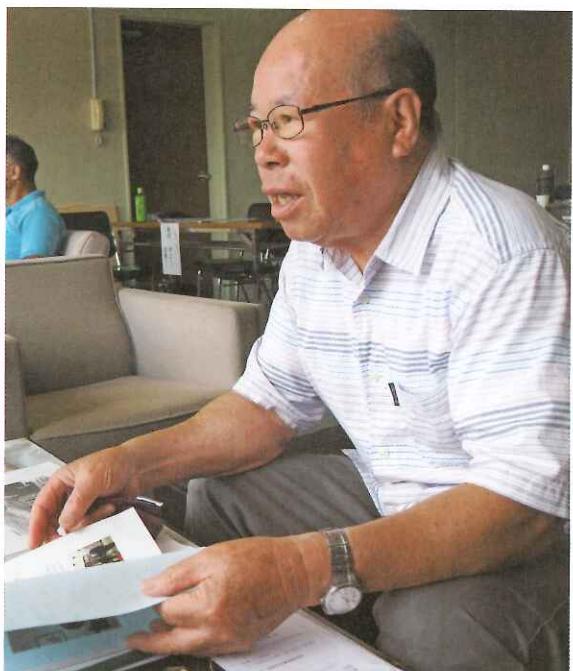


世界の核弾頭数を示すポスター

## 事実を知ることが 平和へのスタートライン —平和祈念式典に参列して—



平和祈念像の前で歌う被爆者合唱団



## 核兵器の恐ろしさを 伝え続ける

—リトニアの地で発信—

4歳の時に被爆した田中重光さんに話を聞きました。田中さんは被爆体験や核兵器の恐ろしさを伝える活動をしていました。

田中さんは今年5月、リトニアに行つたかいがありました」と話してくれました。「歴史の事実を知り、知らせることが大事」という田中さんの言葉が心に残りました。田中さんが教えてくれたように、なんでも好奇心を持つて、いろんなことを見たり聞いたりして、みんなに伝えていきたいです。

故・山口彌さんは、出張先の広島と帰った長崎で2度被爆され、初めて二重被爆者と認定された方です。『山口彌生誕

だつた彌さんの作品で、100年展』を見学し、彌さんの孫の原田小鈴さんに取材しました。原



田さんは彌さんの二重被爆の実体験を、紙しばいと朗読で披露してくださいました。短歌が趣味

## —山口彌さんの子孫の活動— 三世代でつなぐ平和のバトン

【遠藤恋羽・京子記者】

セージが詰まつていて印に残りました。小鈴さんの母さんのお母さんの山崎年子さんも被爆二世として、小鈴さんと一緒に、彌さんの体験を語りつぎ、活動を共にしています。この二重被爆は映画にもなり、翻訳され世界中に発信されています。私たち親子も原子爆弾の被害について、知識を深めることができます。短歌が趣味

【遠藤恋羽・京子記者】

すためには、「世界中の人们が協力し合わなければならぬ」と言われていました。そのためにはまず「同じ学級の人たちの違いを認め、全員と仲良くすることが大切だ」と教えてくださいました。

私は、核兵器をなくすため、友達と仲良くすることから始めたいと思いました。

【長坂桜弥・綾記者】

「非核平和永久に譲らす神あらば青き地球は亡びざるべし」というのが、短い中にも平和へのメッセージが詰まつていて印象的です。



# 自ら届ける平和の願い

## —高校生一万人署名活動—



そこで、平和な世界の実現と核兵器の廃絶を訴えて署名活動をしてきました。言葉の壁に苦労し、「核保有国で訴えても良いものか?」「周りの人はどう思われるか?」と不安だつたそうです。

しかし長崎の被爆者の方たちが、若い自分たちのために声を上げた。永石さんは高校2年生の夏から1年間アメリカに留学していました。

起こすことができたそうです。その結果、1人で集めた署名は1000筆!!

自ら平和の願いを届けたいという思いから、今年度の高校生平和大使になりました。8月14日からスイスのジュネーブに行き、国連の軍縮会議本会議でスピーチするそうです。

私も永石さんの活動に共感したので、自分の平和活動の第一歩として、さつそく署名を集めました。

【桑内瑞生・泉記者】



# 核兵器廃絶に取り組む

## —ナガサキ・ユース代表団の平和活動—



「ナガサキ・ユース代表団」は、長崎で選ばれています。「核兵器の問題」などで国連の会議に参加したり、モンゴ

リヤーなど10名で構成されました。

私は溝越さんと一緒に、何にでも興味をもつて一生懸命取り組んでいます。

ナガサキ・ユース代表団の活動を通して、核の問題をたくさん的人に理解してもらいたい

【遠藤恋羽・京子記者】

# “平和は長崎から”の思いを世界へ



## 平和への思いを自分の言葉で —全国の青少年と学ぶ—

持ち、このフォーラムへの参加を決めたそうです。同世代の参加者と交流してみて「戦争に対する思いも、人それぞれ感じた」と言っています。今後、実際に自分の目で見たこと、聴いたことを広めていきたいそうです。

【若杉悠華・育子記者】

長崎市主催の「青少年ピースフォーラム」に北九州市から参加した中学3年生、倉本竜弥さんにお話を伺いました。このフォーラムでは毎年、全国の平和使節団の青少年

と、長崎の青少年が一緒に被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深めています。

倉本さんは、祖母の沖縄戦の体験談を聴いて、戦争や平和について興味

【向井和・幸子記者】

【中村謙佑】

沖縄では、当時病院施設として使われた洞窟、ヌスマチガマや、ひめゆりの塔などを見学しました。中は真っ暗で、この中で治療は大変だったろうと

【中村謙佑】

まだまだ知らない戦争

—沖縄で学んだこと—

沖縄戦について学んだ中村さん

# まだまだ知らない戦争

## —沖縄で学んだこと—

思つたそうです。

また、中村さんたちからも「長崎の原爆によりたくさんの人が亡くなり、今でも後遺症で苦しんでいる人がいる」と伝え、沖縄の中学生も真剣に話を聞いてくれたそうです。

「8月9日は毎年平和について考えていたけれど、沖縄戦のことは知らなかつた。まだまだ知らない戦争がある」と

語った中村さん。ひさんな戦争が起きていた事を、私も多くの人伝えたいと思いました。

【若杉悠華・育子記者】

平和へのメッセージ 2016

長崎平和祈念式典に参列した方たちに、それぞれの思いをこめたメッセージを書いてもらいました。

【大林】

【田中】

【千葉】

【東京】

【中村】

【奥村】

東京から参加の大林さん。平和についてイラストで表現していただきました。

【桑内瑞生・泉記者】

身近な人に、悪いことをしないこととは、イタリア人のフランチエスカさん

式典に参列した長崎大学学生の千葉愛紗さん

東京から式典に参列した中村陽菜子さん

【遠藤恋羽・京子記者】

# 音楽にのせて届けたい平和への祈り

## —二胡の癒しの音—

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の館長、智多正信さんによる二胡演奏グループ「メモリーズ」を取材しました。



二胡を体験する奥村記者



二胡を演奏する「メモリーズ」は、やさしく癒される音なので、平和の音楽を奏でるのに合っていると思いまして。グroupeを作つたそうですが、メンバーや仕事の合間に練習を重ね、長崎のイベントで演奏することを目指と

していきます。

智多館長は「平和の尊さを言葉だけでなく、音楽で伝えたい」と話しています。

取材では、「クスノキ」など4曲を披露してくれました。知らない曲もありましたが、音がきれいでした。とても良い曲だと思いました。大人になつても、この日聴いた音は忘れません。

平和の伝え方は色々あるということが、取材をして分かりました。僕も、自分なりの方法で平和を伝えたいです。

【奥村尚之・佳恵記者】

アクター企画の取締役社長の川下祐司さんにお話を聞きました。川下さんは、ご自身が被爆二世であり、演劇に携わっていたことから、故・渡辺司さんの演じていた一人芝居「命ありて」

を引き継ぎ、長崎を訪れる修学旅行生などを相手に演じています。遠くから来た子どもたちに、被爆者本人ではなく被爆二世が演じる芝居を見せるこの意味は何かと、自問することがあるそうです。

【田中景嗣・頼子記者】

川下さんは、「自分の芝居を観て、何かが記憶に残つてくれればいい」と言います。川下さんの「365日平和のことを考えていたらその状態は平和ではない」という言葉に共感を覚え、私は日常が平和なことをあらためて実感しました。



## 芝居で記憶を残したい

### —平和を実感するために—



上演する川下さん

原爆に関する記録は、長崎に来なくともある程度知ることができます。

川下さんは、「自分の芝居を観て、何かが記憶に残つてくれればいい」と言います。川下さんの「365日平和のことを考えていたらその状態は平和ではない」という言葉に共感を覚え、私は日常が平和なことをあらためて実感しました。

今、伝えたいことがあります…

—「被爆体験を語り継ぐ永遠の会」—



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館で、永遠の会の甲斐一美さんから朗読を聞きました。その中でも松田慧三さんの体験記「原爆とモンペ中の時計」が印象に残っています。



朗読活動をする甲斐一美さん

記「原爆とモンペ中の時計」が印象に残つてわつてきました。  
朗読した甲斐さんは、「実際の背景を調べ、當時の状況を想像しながら心をこめて読んでいる」と話していました。

被爆後71年目を迎え、被爆者が高齢化する中、被爆者の恐ろしさを次世代につなげる一つの方法と感じました。

【薦田真・昭宏記者】



被爆後71年目を迎え、被爆者が高齢化する中、被爆者の恐ろしさを次世代につなげる一つの方法と感じました。

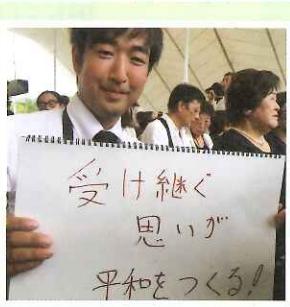
被爆後71年目を迎え、被爆者が高齢化する中、被爆者の恐ろしさを次世代につなげる一つの方法と感じました。

【薦田真・昭宏記者】



式典参列のために長崎に来たアメリカン大学のピーター・カズニック教授と兵庫県三木市の近藤紘子さん

【向井和・幸子記者】

長崎市内の学校に通うスペイン人のレアンドロ・アロンソさん  
【徳琉歌・誠司記者】東京都葛飾区から式典に参列した田中規史さん  
【若杉悠華・育子記者】長崎市内から式典に参列した石田孝子さん、藤田京子さん  
【薦田真・昭宏記者】式典参列した長崎県南島原市議会議長の中村一三さん  
【長坂桜弥・綾記者】式典参列のために長崎に来たアメリカン大学のピーター・カズニック教授と兵庫県三木市の近藤紘子さん  
【向井和・幸子記者】

# 戦後71年目の夏。 私たちのふるさとで調べた戦争の痕跡

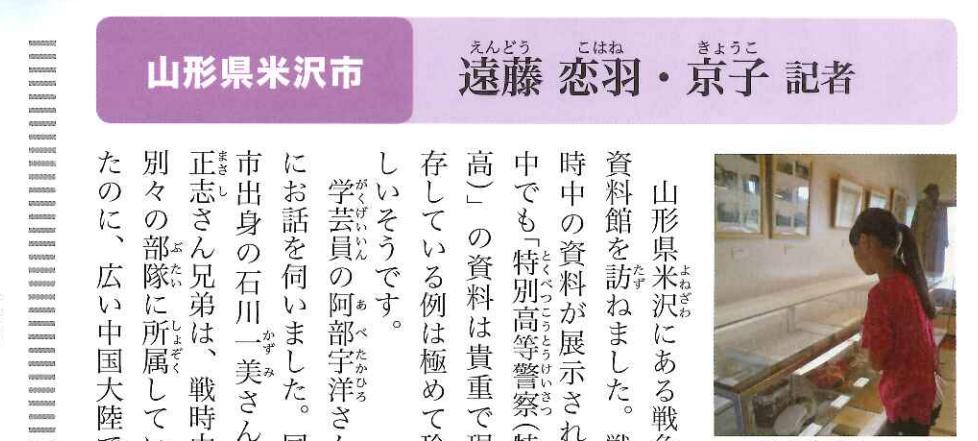
全国9組18名の親子記者があらためて「平和」を考えました

1945（昭和20）年8月9日の原爆投下の日から、長崎は71年目の夏を迎えるました。今年の日本非核宣言自治体協議会（非核協）主催の親子記者募集には、全国から152組の応募があり、抽選で選ばれた親子記者9組18名が参加することになりました。

親子記者のみなさんは、長崎の取材に先がけて、それぞれの地域で「平和」について考え、事前取材をしました。今回は次の4つのテーマからひとつを選択し、記事にまとめています。

- 1) 戦争を体験した方に話を聞いて考えたこと
  - 2) あなたの住む地域にある平和資料館等を訪ねて学んだこと
  - 3) あなたの住む地域で平和を伝える活動をしている人に会って学んだこと
  - 4) 家族で考えた「平和」について

このコーナーでは、親子記者のみなさんが地元で取材し考えた「戦争と平和」についてのリポートをご紹介します（編集部）



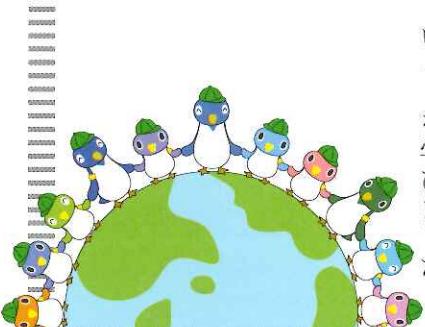
## 逗子市の戦争の跡を調べる

の中に大きな砲台跡があることを知り、改めて足を運んでみました。

三世代にわたつて、家族や友人と度々訪れていた山の上の公園ですが、そこの大になつた池と、丸い展望台、深く掘り下げられたサルの大きな円形の檻の全てが、砲台跡でした。また、かつての司令部はレストハウスに姿を変え、暑い日にはいつもアイスを買う憩いの場になっています。

逗子市に戦争の跡があることに選ばれなければ気付きませんでした。

## 戦争資料館で学んだこと



偶然再会できたそうです。その後、この兄弟の運命は、兄・一美さんが戦死弟・正志さんは一度の召集の末、シベリア抑留を経て、苦労の末帰国されたと説明を受けました。わたしは、戦争が終わつても苦しんだ方が沢山おられたこと、戦争は苦しみと不幸しかもたらさないことを学びました。



